

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

ヨハンナ・シュピーリの生涯と作品考察

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2011-12-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/891

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ヨハンナ・シュピーリの生涯と作品考察

南 は る つ

第1章 ヨハンナ・シュピーリの生涯

1827年6月12日にヨハンナ・ホイサー (Johanna Heuser) は、7人兄弟の4番目の子供としてスイスのチューリッヒ湖の南の小さな村ヒルツェル (Hirzel) で生まれた。父親のヨハン・ヤーコブ・ホイサー (Johann Jakob Heuser, 1783-1859) は、ごく普通の農家の出身であったので、医者になるのにたいへんなエネルギーを費やさなければならなかった。彼は、その頃無医村だったヒルツェルで開業し、1821年にヨハンナの母親マルガレーテ (通称メタ)・シュヴァイツァー (Margarethe Schweizer, 1797-1876) と結婚した。彼女もヒルツェルの出身で、牧師の娘であった。彼女自身宗教的な詩を書き、それを自ら「隠れた女の歌」(Lieder einer Verborgenen, 1858) と呼んで、公にしようとはしなかったが、彼女の書いた賛美歌「おおイエス・キリスト、わがいのちよ、苦難の中の慰めよ」は、スイスの至る所の教会で歌われている。こういうわけで、ヨハンナは、幼少の頃から医者の家と牧師の家の環境に慣れ親しんでいたことになる。彼女は14歳の年まで、6人の兄弟姉妹と一緒に田舎の子供たちの間で成長した。医者である父の家には、子供が7人もいるほかに、祖母と2人の伯母と召使たちが住んでいた。この世界に私たちは彼女の本の中で再び出会う。

母親は子供たちに芝居をしようという気を起こさせ、子供たちと一緒に、啓蒙主義的な、しかしはるか19世紀にまで影響を及ぼした児童文学作家クリスティアン・フェリックス・ヴァイセ (Christian Felix Weise, 1726-1804) の週刊誌「子供の友」(Der Kinderfreund) を読んだ。

母親の希望で娘たちは、のちにもし必要となったならば、教育者として自分たちの生計を立てられるようにしようと、フランス語とピアノを学ぶためにチューリッヒに行った。彼女もその1人として、1841年秋、14歳の時にチューリッヒのおばの所に滞在し、堅信式を受ける前の2年間、そこで教育を受けた。その間に彼女は、コンラート・フェルディナント・マイヤー (Conrad Ferdinand Meyer, 1825-1867) や彼の妹の仲間に加わったが、それによって19世紀の偉大なスイスの作家と親密な文学的コンタクトを持つようになった。マイヤーとの友情は彼が亡くなるまで続いた。たいそう閉鎖的な詩人であるマイヤーにも、彼女は心の暖かさとユーモア

によって、近づくことが出来たのである。

1844年夏にはフランス語を学ぶため、ユフェルドンの寄宿舎に入った。1年後に帰郷し、25歳になるまで弟や妹たちに勉強を教えたり、母親の家事の手伝いをした。

1852年9月9日、25歳の時ヨハンナ・ホイサーは、兄の友人である弁護士ベルンハルト・シュピーリ (Johann Bernhard Spyrri, 1822-1884) と結婚した。2人は新婚旅行でワイマルへ行き、ヨハンナの尊敬していたゲーテの住居を訪れた。夫のシュピーリは、内向的な性格で、自分に負わされた義務を綿密すぎるほどに正確に果たす法律家であると同時に、チューリッヒの「スイス連邦新聞」(Eidgenössische Zeitung) の編集者を務め、1868年には市の文書官にもなった。2人はそれ以後ずっとチューリッヒに定住した。その頃のチューリッヒでは、マイヤーとならぶスイスの代表的な詩人ゴットフリート・ケラー (Gottfried Keller, 1819-1890)、音楽家のリヒャルト・ワーグナー (Richard Wagner, 1813-1883)、そして哲学者のヤーコプ・ブルクハルト (Jacob Burckhardt, 1818-1897) などがサロンのグループを作っていたが、その会合がシュピーリ夫妻の家でたびたび開かれた。しかしシュピーリ夫妻の結婚生活は幸福とは言えなかった。ヨハンナは家事をするのを嫌っていたし、ベルンハルトは多忙でよく家を留守にしていた。そんな中でコンラート・フィルディナント・マイヤーの妹ベッツィー・マイヤー (Betsy Meyer) との深い友情が彼女のよりどころであった。

彼女は、1855年8月17日に一人息子ベルンハルト・ディートヘルム (Bernhard Diethelm) を産んだ。彼女は妊娠中ひどい鬱病にかかり、何年間もの間患っていた。彼には音楽の才能があり、将来はヴァイオリニストを志していたが、生まれつき身体が弱かったため、それを断念せざるをえなかった。ヨハンナは、この息子をこよなく愛し、彼の精神的な教育に心を奪われたあまりに、息子の幼年時代には、自分の文学的な素質を花開かせることができなかった。おそらく、そういう精神的な余裕がなかったのであろう。息子ベルンハルトはチューリッヒの高校を卒業すると、ライプチヒとハイデルベルクの大学で法律を学んだが、心臓の持病のために、ようやくのことで学業を終えた。その後、健康を回復するためにさまざまな努力をするが、報われることなく、1884年5月13日にその短い生涯を終えた。そして、同じ年の12月19日にヨハンナは、夫ベルンハルトをも失ってしまう。

2人が亡くなった後、彼女は閑静な住居に移った。都心からは離れていたため、故郷を思わせるこの家で執筆に従事するかたわら、旅行することも度々であった。スイスをすみずみまで知っていたし、ドイツ、イタリアへと小説の中にも登場する土地に赴いた。

1901年に彼女は自分の病気が重いとわかったが、親しい人にもそのことは告げず、いよいよ死を覚悟した時に原稿や断片やメモなどすべてを焼いてしまった。7月7日の夕方、姪が彼女を訪れるとすでに息を引き取っていた。彼女の亡骸はチューリッヒのジールフェルト墓地に埋葬された。スイスの象徴として彼女の肖像は1951年に郵便切手に、2001年に20CHF硬貨に使用された。

第2章 作家としてのヨハンナ・シュピーリ

ヨハンナ・シュピーリは50歳近くになって彼女の最初の著作を著した。母親の友人でもあった、ブレーメンの牧師コルネリウス・ルドルフ・フィエトル (Cornelius Rudolph Viector, 1814-1897) が彼女の才能を見出し、社会事業への寄付を目的として創作するように示唆したもので、ブレーメンで匿名で出版された。『フローニの墓の上の一葉』 (Ein Blatt auf Vrony's Grab, 1871) である。彼女自身は売れるかどうか不安であったが、予想に反して、この作品は大成功になった。それにつづいて『父の家へ』 (Nach dem Vaterhaus, 1872)、『迷って、見いだされて』 (Verirrt und gefunden, 1873) などを出版した。彼女が書いた最初の児童文学作品は「ジルス湖とガルダ湖のほとりで」 (Am Silser- und am Gardasee) と「ヴィーゼリの道はどうして見つかるか」 (Wie Wiseli's Weg gefunden wird) という2つの中編を『ふるさとを失って』 (Heimathlos, 1878) という題名で匿名で出版された。これが「子供たちと、子供を愛する人たちに贈る本」 (Geschichten für Kinder und solche, welche Kinder lieb haben) の第1巻として、次に第2巻が『遠近から』 (Aus Nah und Fern, 1879) という名前で、「母の歌」 (Der Mutter Lied)、「ペッピーノ、あわや強盗事件」 (Peppino, fast eine Raubergeschichte) の2編が出版された。『ハイジ』はこの第3巻で、つまり彼女の5番目の児童文学作品である。

『ハイジ』の第1部が刊行された時、彼女は53歳であった。彼女は他界するまで、多くの短編小説と長編小説を書き続けた。その中には、1879年から、彼女にとって非常に悲しい年である1884年に至るまでの著作『ふるさとを失って』 (Heimatlos, 1878)、『グリトリの子供たちはどこへ行ったのか』 (Wo Gritlis Kinder hingekommen sind, 1883)、『グリトリの子供たちはさきに進む』 (Gritlis Kinder kommen weiter, 1884)、『ジーナ』 (Sina, 1884) が含まれる。この後、彼女はなお『やぎ飼いのモーニー』 (Moni der Geissbub, 1886)、『彼女はどうなるのか』 (Was soll denn aus ihr werden? 1889)、『どんな子でも人を助けることができないほど小さくはない』 (Keines zu klein, Helfer zu sein, 1890) を書いた。

「作家は50歳より前には何も公表しないのが一番いい」と述べたヨハンナ・シュピーリはその言葉によって、彼女にとって書くことが、自分自身の体験したことや経験したことの再現であることを証明している。彼女にとって、運命や摂理を物語ることは、読者を単に楽しませるだけではなく、読者に道徳的にも教育的にも影響を及ぼすという試みなのであった。

『ハイジ』は彼女の最も重要な作品となった。これは、第1部『ハイジの修業と遍歴の時代』 (Heidi's Lehr- und Wanderjahre, 1880) と第2部『ハイジは学んだことを役に立てることができる』 (Heidi kann brauchen, was es gelernt hat, 1881) に分かれている。シュピーリはゲーテに深く傾倒していた。この題名から、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』と『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』を思い出すことができる。これによって、シュピーリがい

かにゲーテの思想に感化されていたかを、そしてまた、彼女が教養小説を書こうという意図を持っていたことを察することができる。

『ハイジ』は、最初スイスで出版されたのではなく、ゴータ (Gotha) のペルテス出版社 (Perthes Verlag) からイラストなしで出版された。そして、第3版になって初めてヴィルヘルム・プファイファー (Wilhelm Pfeifer) の3枚の木版画が付き、のちにヴィルヘルム・クラウディウス (Wilhelm Claudius) のカラーの表紙が、さらにその後になってからは彼の白黒の絵が付いた。ドイツ語で書かれた本は、手を加えたものや短縮した版を計算に入れなくとも、今日までに何百万部かわからないほど大量に出版された。この本は、世界中の言語に翻訳されている。たとえば、アメリカでは、ボストンの盲人図書館の特別の棚の中に、ブライユ点字で印刷された極めて人気のある、そして最も多く貸し出される本の1つとして収められている。日本には、1920年に小説家でもあった野上弥生子 (1885-1985) によって、「アルプスの山の娘」と題して紹介され (岩波文庫)、第2次世界大戦後には「スピリ全集」全12巻 (1960-1961、白水社) も刊行されたのを初めとして、短縮版や絵本も含めるとこれまで150近くの翻訳が出版された。

ヨハンナ・シュピーリは、12、3歳の少年少女に人気のある著者たち、エーリッヒ・ケストナー (Erich Kästner, 1899-1974)、マーク・トウェイン (Mark Twain, 1835-1910)、アストリッド・リンドグレン (Astrid Lindgren, 1907-2002) らと共に人気の先頭に立っている。

1966年にヨハンナ・シュピーリ協会がチューリッヒのフランツ・カスパー (Franz Kasper) によって設立された。そこの文書保管所には、世界中のハイジ版が収集されており、その他この女流作家の生涯と作品についての文書資料が保管されている。

第3章 ヨハンナ・シュピーリの作品考察

ヨハンナ・シュピーリは『ハイジ』以外にも多数の児童文学作品を創作したが、ここでは以下の6つの作品を含めて、彼女の描いた世界観について考察する。

『バラのレスリ』

『バラのレスリ』 (Rosenresli, 1882) のレスリーは、8歳の少女で、小さなバラを1本手に持っているか、口にくわえているか、胸に差していないことは一度もなかったで、「バラのレスリ」とみんなから呼ばれていた。彼女は村役場の元下級吏員で今は落ちぶれてしまったディートリッヒおじさんと3年前から一緒に暮らしていた。おじさんは妻を亡くしていたし、子供もいなかったし、レスリも孤児である。おじさんは働かずに居酒屋に入り浸っていたので、彼女はいつも自分の食べるものを自分で調達しなければならなかった。

その日も彼女は村はずれの、森の丘に建っている大きな家に着いた。そこではいつもきれいなバラが咲いていて、レスリは憧れに満ちて中をのぞきこんだ。そこは村長の家だった。村長夫人がやさしく声をかけ、バラの花束を作ってくれた。お礼を言って歩いていくと、香水を作っている、「十字路のおかみさん」(Kreuzwegbäuerin)が毎日バラの花を持ってきてくればその度にパンをあげるよと約束してくれた。香水を作るのにとてもたくさんのバラが必要なのだ。帰り道のある小さなみずばらしい家には「苦勞おかあさん」(Sorgenmutter)が住んでいた。「苦勞おかあさん」がそのことを聞くと、「十字路のおかみさん」のところへ行く前に自分の所にきて欲しいという。「苦勞おかあさん」は早くに夫を亡くし、一人息子は落ちぶれて行方知れずでとても貧乏だったけれど、物乞いすることもなく慎ましく生きていた。翌日レスリがバラをもらった後、「苦勞おかあさん」の家に行くと、おかあさんは自分の家に咲いているわずかなバラ一緒に持って行って、パンに換えてきて欲しいとレスリにお願いするのだった。レスリはそれから毎日、村長夫人にバラをもらい、「苦勞おかあさん」のバラと一緒に「十字路のおかみさん」のところへ持って行ってパンをもらい、そのほとんどをおばあさんにあげた。翌年の夏、ディートリッヒおじさんはついに借金のために家を取り上げられ、レスリは下働きに行かされることになった。そんなある日、「苦勞おかあさん」の息子ヨーゼフが立派な機械工になって帰ってくる。彼はレスリがおかあさんの面倒を見てくれたことに感謝し、彼女も引き取って一緒に暮らすことになった。

『安全に守られて』

『安全に守られて』(In sicherer Hut, 1882)の子供たちはシュペーリの作品においては珍しく、両親がそろっている子供たちの物語である。ドレスデンの裕福なフェラント家には2人の少女がいる。エラとおてんば娘リータ。一方、スイスのゲミー峠の案内人カスパーのところには2人の息子ケピーとイェルクが、ポーターの「頑丈なマルチン」のところにはゼプリーという少年を含めて4人の子供がいた。カスパーは稼ぎが十分にあったが、マルチンは貧しかった。

ある夏の日、フェラント一家がゲミーに静養にやってきた。冒険好きのリータはゼプリーからいろいろな楽しいことを聞き出す。ある日、リータが行方不明になってしまった。みんなで必死に探したが一晩中見つからなかった。翌朝、ゼプリーがリータの居場所を知っていると言い出す。リータが森の中に咲いている赤い花を見たがっていたことを彼は知っていたからだ。ゼプリーの案内で、森の奥にみんなで入っていくと、深い谷底の岩のように突き出た所にリータが横たわっているのを発見した。そんなところへ降りていこうという勇気のあるものはマルチン以外いなかった。マルチンは命がけでリータを救い出した。

フェラント氏はマルチンに感謝して牛を贈り、リータの居場所を教えたゼプリーもご褒美として欲しかったムチをもらった。

『グリトリの子供たちはどこへいったのか』『グリトリの子供たちは先へ行く』

『グリトリの子供たちはどこへいったのか』『グリトリの子供たちは先へ行く』(Wo Gritlis Kinder hingekommen sind, 1883. Gritlis Kinder kommen weiter, 1884) では、4つの家庭の子供たちが描かれている。

まず第1に、医者の家。長男のオスカーはいろいろな会を設立するのが大好きな少年。長女のエミは突飛なことを思いついては周りを驚かせている元気な少女。次男のフレッドは、昆虫好きな少年でいつもポケットに虫をいれていて末娘のリクリを驚かせている。リクリはまだ幼いあどけない少女。そしてこの家には父母の他に子供たちの世話をし、よき相談相手である伯母さんが住んでいる。

第2の家には、ドクトル夫人の幼な友達グリトリとハイリの子供ファニーとエルスリがいる。この2人は、母親のグリトリを4歳と3歳の時に亡くし、今は2度目の母親と異母兄弟のハンゼリ、ハイエルリ、ルディ、と暮らしている。ファニーは絵をかくのが大好きな独創の才のある少年、エルスリは、弱々しい、静かなやさしさを持った、素直な控えめな少女である。

そして第3のライン河畔の美しい家には、父親がいない、病気で透き通るほどに青白い顔をした名家の娘ノラが、母親スタンホープ夫人と乳母のクラリッサと一緒に住んでいる。

第4は、工場主ビッケル氏の家である。ビッケル氏とその夫人は、お金持ちだという高いプライドを持っていて、一人息子フェクリツスはわがままいっぱい育てられている。

物語はノラが母親とアルプスのふもとの村ブーフベルクに静養にやってくることから展開する。初めエミが、ノラのよき話し相手となるように父親に言われて訪ねていく。しかし、ノラはクラリッサの影響でもうすぐ自分は天国に行くのだと信じていて、天国の美しさを語り合える友人が欲しいと思っていた。ところが、エミは天国のことなど考えたこともない、元気な樂觀的な性格の少女であった。性格も考え方も生きる目的も全く違う2人は友達にはなれなかった。ノラのよき話し相手になったのは、エルスリであった。エルスリもまた悲しい境遇にあって、ノラの心の痛みをわかる少女であった。一方、ファニーは自分の才能を唯一認めてくれているエミの手助けをかりて、バーゼルの画家の所に弟子入りした。エルスリは学校以外の時間をほとんどノラのそばで過ごしていた。ある日、ノラは、エルスリの肩にもたれて太陽が沈むのを見ながら、天国へと旅立ってしまった。今までノラとずっと一緒だったエルスリは、話し方がノラの声の調子そっくりで、手の動かし方も同じになっていた。このことは、駆けつけたクラリッサをひどく驚かせ、彼女は、スタンホープ夫人のそばに行こうさげんだ。

『ああ、あれはわたしたちの子ですよ、奥さま！ わたしたちの子の声ですよ、わたしたちのノラのことですよ。 あの子の妹です！ わたしたちの子ですよ！』

そこで、スタンホープ夫人はエルスリを引きとることを決め、バーゼルにいたファニーとともにライン河畔の家に連れていく。その後、2人は良家の教育を受けるようになる。そんなあ

る日、ドクトル家の子供たちがやってくる。しかし子供たちは、自分の家にいるときのように、やりたいことが思うようにできず、次第に我が家が、そして故郷がどんなにいいところであるかに気づくのである。そんな最中、エルスリが血を吐いて、クラリッサに見守られながら、ノラの待つ天国へと旅立った。エルスリの葬儀の後、ドクトルの子供たちが故郷に帰ると、ファニーだけがラインの家に残された。画家になりたいというファニーの気持ちが大変強いことを知ったスタンホープ夫人は、画家になるための教育を受けさせることを決めるのである。

『やぎ飼いモーニー』

『やぎ飼いモーニー』(Moni der Geissbub, 1886)のモーニーは題名通りやぎ飼いである。彼の母親は幼い頃に亡くなり、父親は手取り早く稼ぐためにナポリの軍隊に入っているため、彼はおばあさんのエルスベートと一緒に暮らしていた。彼は毎日楽しげな歌をうたいながら山頂へと向かう。

ある夏の夕方、パオラという都会からおばと一緒に静養にやってきた少女がモーニーと知り合いになる。彼女はモーニーの歌声とヨーデルをととても気に入って、それを聞くのを楽しみにしていた。ある日、以前やぎ飼いをしていた少年イェルクリがモーニーを訪ねてくる。彼はモーニーが預かっている中でも特にかわいがっているやぎのちびちゃんが売られることや、宝石のついた飾りを拾って、それを売るつもりだが、そのことを黙っていれば、ちびちゃんを売られないようにして、その分け前をあげるからと言うのだった。モーニーの葛藤が始まる。ちびちゃんが売られるのは耐えられないが、イェルクリがしようとしていることはいけないことなのだ。思い悩みながら、歌も歌わずに山から下りてくると、パオラが心配して彼に駆け寄る。パオラもまたおばあさまから譲られた十字架の飾りをなくして沈み込んでいた。モーニーは一晩中悩んだが、件の宝石のついた飾りがパオラのものだと知ると、何があったのかをパオラに告白する。パオラはモーニーが正直に言ってくれたことに感謝して、彼とイェルクリにご褒美をあげることを約束した。翌日、パオラの手元に十字架が返ってくると、イェルクリは10フランを、モーニーはちびちゃんをもらった。

『学校へ行くコルネリ』

『学校に行くコルネリ』(Cornelli wird erzogen, 1890)の主人公コルネリは、製鉄所の持ち主である父親とスイスの田舎イラーバッハで暮らしている。

母親はいないが、自然の中で自由に走り回る、明るい少女であった。父親は、コルネリに母親がいなかったため、ろくなしつけもしていないことを非常に心配していた。そのためある時、彼は町に住んでいる自分のいとこのドルナーとその友人グリデーレン嬢を呼び、立派な淑女になるためのしつけをして欲しい、と頼んで旅に出てしまう。コルネリは、今までは身なりを気にせず家畜小屋では山羊と戯れ、台所に行っはつまみ食いをして、野原や森で走り回ることができたが、この2人に、すべてを禁止されてしまったのである。そのようないわば押しつけの

教育によって、コルネリは、次第に明るさや元気を失ってしまう。コルネリの唯一の心の支えは、近くに住むマルテであった。マルテはコルネリの母親をみとった老女で、コルネリの成長にこれまで非常に尽くしてきた。こういう状況にあるとき、マルテの所に町から、12歳の男の子ディーノーが静養にやってくる。ディーノーは、父親がいない上に、病弱だが、いつも陽気で快活で、そして回りも陽気にしようと努める少年であった。かたくなになっているコルネリの心も、ディーノーのやさしさの前では、和らぐのだった。父親は帰宅した時、すっかり変わってしまったコルネリを見て、落胆し、自分の試みが失敗だったことを知る。コルネリは2人の婦人が町に帰った後、ディーノーを訪ねるために町に出て、ディーノーの家族——牧師の未亡人で、優しい母親ハルム夫人、画家になることを夢見る長女ニカ、音楽家になりたい次女アグネス、人なつっこい次男ムックス——の中で生活していくにつれ、もとの明るさを取り戻していく。しかし、この家族もまた、ある問題をかかえていた。経済的な理由から、子供たちがそれぞれの夢を断念しなければならない状況に追い込まれていたのである。最後には、明るくなったコルネリを見た父親がこの家族に感謝し、彼らの後見人となり、子供たちみんなの夢を叶えることを約束するのである。

『ふしぎな城』

『ふしぎな城』(Schloss Wildenstein, 1892)には特に個性の違う子供たちが多く登場する。マクサ夫人の5人の子供たちは、牧師だった父親を亡くして以来、母親の故郷に住んでいる。長男ブルーノーは非常に正義感が強い少年。少々短気で、クニッペル判事の2人のいたずら息子エドウィンとオイゲンと四六時中、喧嘩をしている。長女メアはやさしくて気立てがよい少女。次男クルトは、好奇心が強く、冒険好きで、活発な少年。人の特徴を見つけては歌にしている。三男リップポは、曲がったことが大嫌いな、非常にきちょうめんな性格で、大人の言いつけは忠実に守る少年。末娘のメツリはとびきり明るい少女。いつもとっぴなことを思いつき、それを実行に移し、みんなをハラハラさせている。そしてこの5人に加えて以下の子供たちが登場してくる。おとなしくて素直な少女ロネリ。彼女は、昔お城に仕え、一切をとりしきっていたので、「お城のアポロニー」と呼ばれた祖母と2人で暮らしている。メアの友達だったが、ある事からついに絶交してしまうわがままで自己中心的な、エルヴィラという少女。そして、マクサ夫人の家にしばらく滞在する、レオノーレ。彼女は病弱だが、みんなの心をすぐに魅了してしまうような、天使のようにかわいらしい少女である。彼女は、両親を早くに亡くし、遠縁のおばたちに育てられている。そしてレオノーレの兄サロ。彼は、妹思いで、優しく、謙虚だが、しっかりした少年である。彼はハノーファーの寄宿舎に入っている。つまり、文中の言葉を引用すれば、この兄弟は「わが家」を持たないかわいそうな境遇にある。

物語はこの村のむこうの山のいただきにある古城を巡って、展開していく。マクサ夫人によって、昔の悲しい出来事が明らかにされる。この古城には、マクサ夫人が幼少時代の頃、男爵夫人と2人の少年、兄ブルーノと弟サロ、そして後から男爵夫人の遠縁で、養女にきたレオ

ノーレが住んでいた。マクサ夫人は彼らと城で、美しい時を過ごしたのだった。この城には昔から兄弟同志で殺し合う不吉な宿命があると噂されていたが、やはりこの時も、同じようなことがあった。大学を卒業した兄弟が2人とも、養女だったレオノーレと結婚し、母親と一緒に暮らしたいといい出したのであった。それがもとでこの兄弟は喧嘩し、弟サロを殺してしまったと思ひ込んだ兄ブルーノは、そのまま姿を消してしまう。母親は、サロとレオノーレを連れて南国に行き、3年後に亡くなった。その少し前にサロとレオノーレは結婚したが、生まれたばかりの女の子と小さな男の子を残して2人とも亡くなってしまった。ブルーノは、一度城に帰ってきたが、誤解して、また旅に出てしまう。その時に連れていた召使のトリウスが、一人で2、3年前に戻ってきて、今もその城に住んでいる。

さてある時、マクサ夫人の兄フィップが、そのサロ男爵とレオノーレの子供ではないかと思われる少女レオノーレと偶然出会った。レオノーレは病気にかかっていた。その話を聞いたマクサ夫人は、彼女に同情し、しばらく引きとることになった。一方、この城に忠実に長い間仕えていたアポロニーは、兄のブルーノ男爵が帰ってきているのではないかと考えていた。そこで、何度もトリウスに問いただすが、決して門を開けることはない。しかし、メツリが門をうまくくぐりぬけ、城の中に入っていき、そこで男爵と出会う。死ぬ時をひたすら待ちつづけていたブルーノ男爵の絶望的な心を、メツリが次第にほぐしていく。メツリがレオノーレを城に連れて行き、男爵は彼女の存在を知る。メツリを通じて、マクサ夫人が城に呼ばれ、マクサ夫人を通じて、アポロニーが呼ばれた。アポロニーは、男爵の許しを得て城に仕えることになり、喜びの涙を流しながら、荒れ果てていた城を昔の美しい城に蘇らせる。そこへレオノーレとサロが引きとられることになった。今まで「わが家」がなかった2人にやっと幸福が訪れたのである。

第1節 作品考察①……自然描写

シュペーリのこの6つの作品、および「ハイジ」を概観し、ここにシュペーリの作品の特徴を述べてみたい。

シュペーリの作品には、さまざまな性格の子供たちが登場し、その多くはスイスの自然描写から物語が始まっている。

シュペーリの作品の第一の特徴は、彼女は作品の中で、何事にもくじけない、明るい性格の少女ハイジ、レスリ、コルネリ、メツリ、リータ、そしてエミを登場させ、自然の中を走り回らせることによって、アルプスの自然を非常に美しく描写している点である。

特に『バラのレスリ』、『安全に守られて』、『学校へ行くコルネリ』での描写は印象的である。

「……彼女は今幸せにぴよんぴよん跳ねながら、牧草地を横切っていました。明るい夏の晩でした。ちょうちよたちが青い空気を上がったたり下がったりしながらひらひら飛んでいて、はるか上の方でつばめたちが輪を描いて飛んでいました。そしていかにも夏らしく、牧草地の中でぐるりと回ってリンリンと楽しげにコオロギが鳴いていたので、バラのレスリはますます楽しい気分になって、まるでちょうちよと一緒に舞い上がろうとするかのように、ますます高く跳びはねました。そんな風にレスリはじきに村はずれの、森の丘に沿ってある、そしていつも一番美しいバラを咲かせている庭に所に着きました。」(レスリ)

「……リータは地面に立ったかと思うと、すぐに喜びのあまりあちこち走り回りました。そして何が一番素敵なのか全くわからなかったのです。ドアの前に小さなベンチのある木造りの小さな家なのか、それとも花々や小川みに囲まれている緑の草原なのか、岩の上やもみの木の上で黄金に輝く夕陽の輝きなのか。すべてがものめずらしくてすてきでした！」(リータ)

「……音を立てて流れるイラー川のほとりでは、また若いぶなの木が、みどりの葉を出しはじめました。ざわめく南風が、そのかるいこずえを、右に左にとゆさぶっていました。……森をよこぎって、向かい風にさからったり、追い風を背にうけたりしながら、ある小さな女の子が走っていました。」(コルネリ)

しかし、それとは対照的に、ディーノー、レオノーレ、ノラは都会に住んでいる子供たちはリータを除いてみんな病弱な子供たちである。都会についての描写はたとえば、『学校に行くコルネリ』の中で、ディーノーの住んでいるアパートのようすがこう描写されている。

「……まわりの家は、みんな高くそびえたっているのだから、下からではそのいちばん上の窓が、ほとんど見えないほどでした。……さてここからが、ますますひどいのぼりでした。最初のうち階段は高くてもあかるかったけれど、それからだんだんに暗く、狭く、せまくなって、最後には、踏みへらされて不ぞろいな階段が、ひどく陰しいのぼりになっていました。そしてこの階段は、狭いドアに通じていましたが、その前には、ちょっとした立ちどまる場所さえもない、最後の狭い一段があるだけでした。」

また、リータの家は都会であるドレスデンにあるが、次のように描写されているが、たった一つの「美しい」という形容詞のみで他の表現はひとつもないのである。

「美しいドレスデンの町のエルベ川沿いの高台からそう遠くないところに大きな石造りの家がありました。……」

そしてこの都会の子供たち、そしてリータの母親は、ノラを除いてみなアルプスの小さな村に静養にやってきて、みんな健康を取り戻している。つまり、都会とアルプスが全く対照的に描かれているのである。これによって、シュペーリがどんなにアルプスを、そして舞台のほとんどが田舎であるということから、なにより故郷を愛していたということがわかる。そして彼女は、都会が子供たちにとってよい環境ではないと主張する。前述したように、シュペーリの息子も病弱であった。おそらくそのことが、彼女が作品に、都会育ちの病弱な子供たちを登場させる動機となったのであろう。しかし、アルプスが美しく描かれれば描かれるほど、都会は「悪」として強調されなければならない結果となった。

第2節 作品考察②……人物像

シュペーリの描く重要な役割をもった子供たちは片親か孤児である。

唯一の例外は『安全に守られて』に登場する3つの家庭である。リータの母親だけが病弱だが、歩けないほどの病気ではないし、全員が健在である。

『ハイジ』を見てみると、ハイジには孤児、ペーターとクララは片親である。大人たちを見ても、おじいさんにも、ペーターのおかあさんにも、おばあさんにも、ゼーゼマン氏も、またクララのおばあさまであるゼーゼマン夫人にも、脇役であるはずのお医者さまにもみんな伴侶がいない。つまり、『ハイジ』においては、夫婦が一組も揃っていないのである。

『バラのレスリ』はどうだろうか。レスリは孤児である。おじさんに育てられているが、おばさんは亡くなっている。「苦労お母さん」は洋服屋だったご主人を早くに亡くしていて、ヨーゼフはまだ未婚である。

『グリトリの子供たち』のファニーとエルスリは継母はいるが実の母親は幼い頃に亡くなっている。ノラにはお父さんがいない。

『やぎ飼いモーニー』のモーニーはお母さんを亡くしていて、父親とは一緒に暮らしていない。未亡人のおばあさんと暮らしている。

『学校に行くコルネリ』のコルネリにはお母さんが、ディーノにはお父さんがいない。

『ふしぎな城』マクサ夫人の5人の子供たち、ブルーノー、メア、クルト、リッポ、メツリ、は、父親を亡くしている。ロネリ、レオノーレとサロは孤児である。

しかしながらこれらの子供たちは悲しい境遇であるにもかかわらず、みな素直で、純真な子供である。その中でもレスリにその傾向が顕著である。同じ孤児である少女ハイジとレスリを比較してみよう。

ハイジには確かに両親がいないが、放置されることもなく、むしろ大切に育ててくれたデーテおばさんやおじいさんがいる。裕福とは言えないが、山の上に行った時におじいさんが持たせてくれたチーズはペーターのより大きかった、というのだから、あきらかにペーターの家よりも豊かである。おじいさんは村人からは嫌われているが、今は墮落した人間ではない。つまり食べ物がなく困ったということは一切ないのだ。

一方レスリといえば、引き取ってくれたおじさんは妻も子も職もなく、すっかり落ちぶれて、自分の食べるものは自分でなんとかしろ、と言って毎日居酒屋に出かけてしまい、最終的には借金のために家を取られ、レスリを下働きに出すことになる。どこから見ても何一ついいことのない、救いのない、悲惨な環境のこの少女をシュピーリは誰からも好かれる素直な性格で、いつもお腹をすかせているのに、「苦労おかあさん」に自分の分よりも大きなパンをあげる、やさしい心をもった女の子として描いている。

しかしその反面、アルプスの自然の中で育っているにもかかわらず、両親がそろっている家の子供たちはずるがしこかったり、やさしさのない子供である。

「グリトリ」の医者の子の家のエミは死を目前にしたノラの気持ちが全く理解できない、突飛な少女で、兄弟のオスカーやフレッドも決して印象よい少年に描かれてはいない。

「モーニー」のイェルクリは拾ったものを売ってしまおうと考えるずるがしこい少年。

『ふしぎな城』のエルヴィラはわがままで自己中心的な少女である。シュピーリはリータのように両親が揃っていても素直でいい子供も登場させるが、片親や孤児の子供たちを悪い子供に描くことは決してしなかった。

シュピーリの作品には、真の意味での悪い人間は登場しない点も彼女の作品の特徴の一つである。「ハイジ」のロッテンマイヤー女史、そして「学校へ行くコルネリ」のドルナー嬢とグリデーレン嬢は、ハイジやコルネリを追いつめてしまうが、決して悪意からではなく、むしろ立派な淑女に育てようという意気込みから、彼女たちを「しつけ」たのである。ただその方法が、ハイジやコルネリの場合には間違っていたというにすぎない。そして、ハイジのおじいさんやブルーノー男爵は、共同体を拒み、山の上でひっそりと暮らしていて、一見冷淡なイメージを与えるが、ハイジやメツリの無邪気さが、そのかたくなな心を解し、彼らの心の奥底にある暖かな心を引きだす。ブルーノー男爵の召使のトリウスもまた、杖をもって子供たちを、城から追い払っているが、最後には『帽子が地面につきそうなほど、深いおじぎをして』マクサ

夫人と子供たちを城に迎え入れる。悪い人間が存在していないことは、むしろ現実とは一致しないが、読者に安堵感を与えている彼女の作品の1つの魅力である。

第3節 作品考察③……キリスト教について

しかしながら特に特徴的なのは、「ハイジ」におけるペーターのおばあさん、そして「苦労おかあさん」、エルスバート、マルテ、アポロニー、クラリッサといった人生の救いのすべては、キリスト教にあるといった考えを持った信心深い老女を登場させたり、また牧師の家——とはいってもここでは牧師である父親はすでに亡くなっていて、その未亡人の家といった方がいいだろうが——での会話を通して、極端にキリスト教を強調している点である。

『ハイジ』では、ホームシックにかかっているハイジにクララのおばあさまがお祈りすることを教える。

「……誰にも言えないようなつらいことがあったら、天にいらっしゃる神さまに申し上げて、お助けくださいとお願いするのです。神様は私たちの苦しみをみんなわかっていて、どんな苦しみもいやしてくださるのですからね。あなたは毎晩神さまにお祈りして、神様のさずけてくださったいいことにお礼を申しあげ、わるいことから守ってくださるようにお祈りしていますか？」

ハイジがお祈りしていないと言うと、

「いいかい。ハイジ。助けてくださる人を誰も知らないから、そんなに苦しいのですよ。心にいつも重くのしかかるものがある時は、いつでも神さまのところへ行って、なにもかも申しあげることができるし、誰にも助けてもらえないような時には、助けてくださいとお願いすることもできるのです。神さまはどんな時でも助けてくださって、私たちの心をまた明るくしてくださるのですからね。」

ハイジはこの忠告を忠実に守り、お祈りすることを憶えて、うれしいことがある度に神に感謝し、おじいさんを教会に導いて、社会復帰させることに成功する。

『バラのレスリ』では、「苦労おかあさん」が『ハイジ』におけるクララのおばあさまの役割を果たしている。お祈りをよく知らないレスリに「苦労おかあさん」は次のように諭す。

「……誰だって、何か苦しい目に会った時、すぐにそこから逃げてしまっただけじゃないのよ。いいこと？ 私たちはやはり静かにじっと耐えなければならないのです。なぜなら神さまは、私たちが学べない何かを、それによって教えようとなさっているのですから。なぜなら私たちが本当に苦しい時、悲しい時には、私たちは神さまのもとに助言やなぐさめを求めて、そして神さまをよく知るので。そうすると、私たちの心の確信が出てくるのです。なぜなら私たちが呼んだ時には、私たちに助け、お聞き下さる神さまが天にいらっしゃると気づくからです。あなたも神さまにお祈りしていますか、レスリ？」

学校で習ったお祈りしか知らない、というレスリに、苦勞お母さんは続けてこう言う。

「それならただ心から神さまにお祈りしなさい。昼間に何か悪いことをしてしまった時には、神さまに許しを請うのです。そして神さまがあなたに助けて下さるように、あなたがもう悪いことを2度としないようお願いするのですよ。わかる、レスリ。そんな風にきちんと神さまにお祈りすることができた時には、またとても明るくなるのですよ。そしてもし私はいつもそうしていなければ、苦しみのあまりもうとっくに死んでしまったでしょう。」

「どうして？」とレスリが尋ねると、

「そうだね、ごらん。私には理由がたくさんあるんだよ。私はとても貧しくてやっと生きている。それに私には1人の子供、息子が世間のどこかにいるんだよ。そして彼のことは何1つわからない。ひょっとしたら彼は惨めな状況に陥っているかもしれない。もう死んでいるかもしれない。私は彼が生まれた時とは違って、毎晩神さまに彼をお任せして、神さまに『あの子はあなたのものです。彼を助けて下さい！』とお願いしなければ、私は不安のあまり眠ることはできないでしょう。しかし、私がそうお祈りをした時に、また慰めと確信が心に湧いてくるのですよ。」

「それなら、私もおばあさんのヨーゼフのためにお祈りをして手伝うわ。」
とレスリが言う。

「うれしいわ、レスリ、うれしいわ。あなたがヨーゼフのために祈ってくれるのなら、それはあなたのためにもなりますよ。私にはわかっています。あなたにはお祈りが必要なんですよ。」

こうしてレスリもお祈りすることを憶えて、ヨーゼフのために祈っていたことが最終的には彼女を幸福へと導いている。

この点でこの2つの作品は酷似しているが、『安全に守られて』ではちょっと違う。ゼブリーをはじめ、ゲミー峠の子供たちが祈りを捧げるということはなく、フェラント家がお祈りをするのだが、エラーとリタはすでにお祈りするのが当たり前になっている。リータが行方不明になって夜まで見つからなかった時、お姉さんのエラが母親に次のようにいう。

「ああ、ママもう一度、神さまがリータをお守りくださり、じきに家に戻して下さるようお願いしましょうよ。」

そして、母親はその度に喜んでそうしようと思い、エラは母親のベットのそばに膝まづいて、「神さまがリータをすべての不幸からお守りくださり、パパにリータのところに行く道を教えて下さるように」神さまをお願いしている。またリータは谷底に落ちた後、眠り込むまでのようすを語っている中で次のようにいっている。

「……それから私は今、神さまが天使を送って下さるようにお祈りしなければならぬ、そうすれば眠ってしまっても、天使が私を守ってくれるって思って、私はお祈りしたわ。

『両方の羽を広げなさい、
ああ、イエスさま、私の喜び、
あなたの雛鳥をお包み下さい！
悪魔が私を飲み込もうとしたなら、
天使に歌わせて下さい。
この子供を傷付けてはならないと。』

そして、フェラント夫人が、たいへんな興奮から回復すると、家族全員で岩壁へと登っていき、神さまが、守りの手を目に見えて子供の上に広げて下さった場所で、もう一度、神さまに心から自分で賛美と感謝の言葉を言うのだった。

『グリトリの子供たち』においては、病気の名家の娘ノラが、乳母のクラリッサにいつも天国の歌を歌って欲しいとせがんでいる。

ノラが亡くなったあと、クラリッサはエルスリを心配して、次のようなことを言って聞かせる。

「……人間はだれでも心配事があったら、なんでも神様の前に持ち出すことができるのです。神さまはいつでもたとえ人の目には逃げ道が見つからないような時でも、かならず助けてくださります。ただ、神さまにお願いするのを途中でやめてしまっただけなのですよ。」

『やぎ飼いモーニー』では、信心深いモーニーのおばあさんは、モーニーにこう言って聞かせることなしに、朝送り出すことはなかった。

「モーニー、忘れるんじゃないよ。お前があの上ではどんなに神さまに近くなるかということ。そして神さまはすべてをごらんになり、お聞きになっていて、お前は神さまの目の前では何も隠すことはできないんだってことを忘れてはいけないよ。でも神さまはお前を助けるために近くにいらっしゃるのだということも忘れてはいけないよ。だからお前は決して恐れることはないんだ。お前がもしあの上で人を呼ぶことができなくて、苦しい時には、神さまに向かって叫びなさい。神さまはお前に言うことをすぐにお聞き下さって、お前を助けに来て下さるんだ。」

モーニーは、その言葉に元気づけられ、人気のない山や高い岩を登っていても、静けさに恐れも驚きもしなかった。なぜなら彼はいつも次のように考えていたからだ。

「高い所へ登っていけばいくほど、ぼくは神さまの近くにいるんだ。そしてぼくがどんなことに会っても、もっと安全なんだ。」

しかし、この神への忠誠心が彼を苦しめる。十字架のついた飾りの件で彼が苦しんでいるのは、それが神への背信行為だと思っているからだ。

一件落着すると、モーニーが不思議に思っていたおばあさんの所に戻っていき、その出来事全部を始めから話すと、おばあさんは真面目な調子で次のように言った。

「モーニー、今こうなったことを、お前は一生の間ずっと覚えておかなければね！お前が子やぎを助けるために、正しくない行いで悩んでいる間に、神さまはすでに長い間子やぎを助けて下さっていて、お前は神さまに正しいといえるようなことをしたらすぐに、お前を喜ばせるためにある道を見つけて下さったのだよ。お前がもしすぐに正しいことをして神さまを信頼したならば、すぐにすべてがうまくいったことだろう。今、神さまはお前が一生の間ずっとこのことを忘れてはな

らないように、お前が受けてもいい以上にお前をお助け下さったのだから。」

とモーニーは熱心に賛成しながら言う。

「はい、ぼくはそのことを決して忘れませんよ。……そしていつでもすぐに考えます。ぼくは神さまの前で正しいというようなことだけをしなければならない。その他のことは、神さまがいいようにして下さるのだと。」

それからの日々、彼はたびたびこのことを思い出して、心の中で思うのだ。

「もう二度とあんな風にならないようにするにはどうしたらいいのか、僕は知っている。僕は楽しげに空を見上げることができないようなことは、もう絶対にしない。なぜってそれは神さまには正しくないことなのだから。」

『学校へ行くコルネリ』の中では、町に行くのを嫌がっていたコルネリを、マルテが説得する場面で、マルテは次のように言っている。

『……しかし、こうしてわたしが抵抗すればするほど、ますます自分のあじわう絶望感が、こわくなってゆくのでした。もうほんとうにせっぱつまってしまい、わたしはこうさげびました。「いったいだれもこのわたしを、助けてくれることができないのだろうか？」するととつぜん、助けてくださるのはだれかということがはっきりとわかったのです。わたしはひざまずいて、神さまにお願いしました。「おお、どうかわたくしを助けてくださいまし！あなただけが、このわたしを助けてくださるのです、どうかお手をおかしてください！

……どのようなつらいことがあろうとも、あなたはなんにつけ神さまのご助力をおねがいできます。神さまは、いつでもあなたを助けて、あなたにとっていちばんいいようにしてくださり、あなたの幸福に役立つことをしてくださるのです。』

このようにして、主人公自身がこれらの敬虔な人物に関わりあっている、またはその家に属しているということで、作品全体が宗教性を帯びている。このことはシュピーリの作品のたいへん大きな批判の対象となっている。

たとえば、ハインリッヒ・ヴォルガストの『わが国児童文学の悲惨』ではこう記述されている。

『……重要なのは、芸術的な点での一面性である。その一面性ゆえに、たしかに作者の宗教的な傾向から流れ出る、現在と現実からの非リアリスティックな背反が明らかになる。一見したところ、悲惨そのものは彼女の芸術的関心を刺激しなかったようだ。シュペーリの場合、悲惨はたいてい、神への信頼と登場人物の善良に光をあてるためにのみ描かれる。そういうわけで、心ゆさぶるモチーフのテーマが、センチメンタルな効果しかあげないのである。……シュペーリの作品の中でもっともすぐれている「ハイジ」においてさえ、……宗教的な力が導入されるやいなや、すぐれた性格描写の技術も破綻する。』^{注)}

注)：池田香代子訳「アルプスの少女」(少年少女世界文学館 16 1987年 講談社) 308 ページ参照。

第4節 作品分析③……物語の結末

結末からも共通したシュペーリの考えが窺える。

すべての物語でさまざまな出来事の後、裕福な家庭からの感謝の印として、主人公が品物をもったり、引き取られたりしている。

『ハイジ』 …………… ハイジはおじいさんの希望でおじいさんが亡くなったあとは、ゼーゼマン氏がハイジの面倒をみることになると同時に、クララのお医者さまがデルフリに住むことになり、ハイジを養女にする。

ハイジの希望でフランクフルトから自分が使っていた、高い枕が3つと厚み毛布のついたベットが贈られることになったが、これをハイジはペーターのおばあさんにあげることにした。

ペーターはおばあさまに毎週10フランずつもらえることに。クララは自分を健康にしてくれたお乳を出してくれたやぎの白鳥に100ポンドの塩を贈ることになった。

『バラのレスリ』 …………… レスリは奉公に出される直前に「苦労おかあさん」の家に引き取られ、ヨーゼフに養われることになる。

『安全に守られて』 …………… ゼプリーは憧れていたムチを、父親のマルチンは牛をフェラント家から贈られる。

『グリトリの子供たち』 …… エルスリが亡くなったノラの代わりにスタンホープ家に引き取られるがノラのいる天国へ旅立つ。ファニーがスタンホープ夫人の援助で画家になるための勉強をすることになった。

『やぎ飼いモーニ』 …………… パオラから、モーニーはやぎのちびちゃんを、イェルクリは10フランもらう。

『学校へ行くコルネリ』 …… コルネリの父親がディーノー一家の後見人となって、兄弟姉妹たちの夢を叶えるための援助をする。

『ふしぎな城』 …………… ブルーノ男爵のお城にレオノーレとサロが引き取られる。

シュピーリは確かにアルプスと都会を善と悪に区別し、都会の子供は病弱、田舎の子供は健康に描写することによって、経済的な豊かさは何にもならないと主張してはいるが、物語の結末を見てみると、結局のところ経済的な豊かさがみんなを幸せに導いているという矛盾が生じているのではないだろうか。

この点について『グリトリの子供たち』の中にシュピーリの考え方が汲み取れる箇所がある。エルスリがファニーに次のように語っているのだ。

「でも、ファニー！クラリッサお婆さんが言うには、私たちは毎日楽しく暮らしていて、必要なものは、何でも神さまが必要以上に与えてくださっているけれど、そういう時には、貧しい不幸な人たちのことを考えて、できるだけ助けてあげなければいけない、というのよ。……何かしてあげなければいけないし、たくさん物をもらったら、何も無い人に分けてあげなきゃいけないっていつも思っているの。」

第5節 シュピーリの教育観

さらにここで簡単に、シュピーリの教育感を考察してみることにする。レスリはろくにパン

も食べられないくらい貧しいが学校には通っている。ファニーは援助を受けて画家になるための勉強をする。コルネリも学校へ行くことになり、ディーノーの兄弟姉妹たちも教育を受けられることになる。レオノーレとサロも十分な教育を受ける体制ができた。シュピーリの母は娘たちに幼いから本を与え、フランス語やピアノを習わせるほど教育熱心であった。シュピーリ自身が教育の大切さを身にしみていたし、実生活でも一人息子の教育に非常に熱心であった。また、医者家庭に育った彼女は、貧しいがゆえに教育を受けられない子供たちを見てきたのかもしれない。せめて物語の中で彼らの願いを実現しようとしたのではないか。

別の観点から見ると、ハイジの教育に成功したのは、クララのおばあさんであった。おばあさんは字の読めないハイジにまず絵本を与えて、これを読んでみたいという気を起こさせ、その結果、字を覚えさせることに成功する。コルネリは、ハルム夫人とその子供たちの中で生活し、その愛情に触れていくにつれ、明るさを取り戻し、嫌がっていた町での学校教育を受けられることになる。クララのおばあさんもハルム夫人も、まず第一に、子供の気持ちを考え、その子供に応じた教育をおこなっている。これがシュピーリの理想としていた教育の真の姿ではないだろうか。

シュピーリの作品のほとんどは、登場人物すべてが幸福になることによって終わっている。そしてまた、シュピーリの作品に登場するほとんどの子供たちは、孤児か、片親の子供たちである。しかし、この子供たちにさまざまな個性を与え、無邪気ないたづらをさせ、みんな生き生きと明るく描かれている。このようなかわいそうな子供たちへの愛情、理解、そして何より、やさしさが彼女の作品の中には満ち溢れている。

このように彼女の作品でしか味わえない、アルプスと子供たちへの愛情や、心の暖かさを持つこれらの作品が、強調された宗教性を持つがゆえに、「センチメンタル」と評価されることは非常に残念なことである。シュピーリは生涯、どんなに勧められても自伝を書かなかった。シュピーリは作品を通して、自分の生涯を我々に伝えている。アルプスの自然の中で走りまわる少女、これはまさにシュピーリの少女時代の姿以外のなにものでもない。一方では多くの批判を浴びながらも、彼女の作品が、とりわけ「ハイジ」が、130年以上たった今でも、世界中の多くの子供たちに新鮮な感動を与え続けているという事実は、誰にも否定できない。

(本学講師＝ドイツ語担当)

ヨハンナ・シュピーリの作品目録

1871, Ein Blatt auf Vrony's Grab 『フローニーの墓の上の一葉』

1872, Nach dem Vaterhause! 『父の家へ』

1873, Aus früheren Tagen. 『幼いころから』

1872, Ihrer Keines vergessen. 『彼らの一人をも忘れず』

- 1872, Verirrt und gefunden (Aus dem Leben) (Erzählband) 『迷って、見いだされて』
- 1878, Heimathlos. (mit den Erzählungen Am Silser- und am Gardasee und Wie Wiseli's Weg gefunden wird) 『ふるさとを失って』(「ジルス湖とガルダ湖のほとりで」「ヴィーゼリの道はどうして見つかるか」)
- 1879, Aus Nah und Fern. (mit den Erzählungen Der Mutter Lied und Peppino, fast eine Räubergeschichte) 『遠近から』(「母の歌」「ペッピーノ、あわや強盗事件」)
- 1879, Verschollen, nicht vergessen. Ein Erlebnis, meinen guten Freundinnen, den jungen Mädchen 『消息は絶えたが、忘れずに』
- 1880, Heidi's Lehr- und Wanderjahre. 『ハイジの修業と遍歴の時代』
- 1880, Im Rhonethal 『ローヌの谷で』
- 1880, Aus unserem Lande. (mit den Erzählungen Daheim und wieder draussen und Wie es in Waldhausen zugeht) 『わたしたちの国から』(「うちで、そしてまた外で」「ヴァルトハオゼンのできごと」)
- 1881, Am Sonntag 『日曜日に』
- 1881, Heidi kann brauchen, was es gelernt hat. 『ハイジは習ったことを役立っていることができる』
- 1881, Ein Landaufenthalt von Onkel Titus. 『ティツスおじさんの転地』
- 1882, Kurze Geschichten für Kinder und auch für Solche, welche die Kinder lieb haben. (mit den Erzählungen Beim Weiden-Joseph, Rosen-Resli, Der Toni von Kandergrund, Und wer nur Gott zum Freunde hat, dem hilft er allerwegen! und In sicherer Hut) 『子供と子供を愛する人たちのための短編集』第1巻(「やなぎのヨーゼフ」「ばらのレスリ」「カンダーグルントのトーニ」「神さまだけを友だちにすることは至るところで助けられる」「安全に守られて」)
- 1883, Wo Gritlis Kinder hingekommen sind. 『グリトリの子供たちはどこへ行ったのか』
- 1884, Gritlis Kinder kommen weiter. 『グリトリの子供たちはさきに進む』
- 1884, Sina 『ジーナ』
- 1885, Aus dem Leben eines Advocaten 『ある弁護士の生活から』
- 1886 Kurze Geschichten für Kinder und auch für Solche, welche die Kinder lieb haben. Zweiter Band. (mit den Erzählungen Moni der Geissbub, Was der Großmutter Lehre bewirkt, Vom This, der doch etwas wird, Am Felsensprung und Was Sami mit den Vögeln singt) 『子供と子供を愛する人たちのための短編集』第2巻(「やぎ飼いモーニー」「おばあさんの教え」「ティスは何かになる」「大岩」「ザーミは小鳥たちと歌う」)
- 1887, Was soll denn aus ihr werden? 『彼女はどうなるのか』
- 1888, Arthur und Squirrel. 『アルトゥールとスキレル』
- 1888, Aus den Schweizer Bergen. (mit den Erzählungen In Hinterwald, Die Elfe von Intra und Vom

- fröhlichen Heribli) 『スイスの山々から』(「ヒンターヴァルトで」「イントラの仙女」「陽気なヘリプリ」)
- 1889, Was aus ihr geworden ist. Eine Erzählung für junge Mädchen. 『彼女は何になったのか。』
- 1890, Cornelli wird erzogen. 『学校へ行くコルネリ』
- 1890, Keines zu klein, Helfer zu sein 『どんな子でも人を助けることができないほど小さくはない』
- 1891, In Leuchtensee (mit den Erzählungen In Leuchtensee und Wie es mit der Goldhalde gegangen ist) 『ロイテンゼーにて』(「ロイテンゼーにて」「ゴルトハルデはどうなったか」)
- 1892, Schloss Wildenstein. 『ヴィルデンシュタイン城』
- 1894, Eine vom Haus Lesa. 『レーザ家のひとり』
- 1901, Die Stauffer-Mühle 『シュタウファーミューレ』

参考文献

- Bettina Hürlimann : Europäische Kinderbücher 1959, Atlantis Verlag, Zürich 「子どもの本の世界」(バットイーナー・ヒューリマン著 野村滋訳 福音館書店 1969年)
- Johanna Spyri : Heidi's Lehr- und Wanderjahre 1880, Heidi kann brauchen, was es gelernt hat 1881, 「アルプスの少女」(関楠生訳 童心社 1988年)
- Johanna Spyri : Heidi's Lehr- und Wanderjahre 1880, Heidi kann brauchen, was es gelernt hat 1881, 「アルプスの少女」(池田香代子訳 少年少女世界文学館 16. 1987年 講談社)
- Johanna Spyri : Gritlis Kinder hingekommen sind 1883, Gritlis Kinder kommen weiter 1884, 「ぼくたちの仲間」(大畑末吉訳、スピリ少年少女文学全集 2 1960年 白水社)
- Johanna Spyri : Schloß Wildenstein 1892, 「ふしぎな城」(山下肇・子安美知子共訳、スピリ少年少女文学全集 3 1960年 白水社)
- Johanna Spyri : Cornelli wird erzogen 1890, 「学校へ行くコルネリ」(辻理訳、スピリ少年少女文学全集 9 1961年 白水社)
- 波多野完治・島田謹二監修：「世界の児童文学」(国土社 1967年)
- 高橋健二：「シュペーリの生涯」(彌生書房 1972年)
- 日本独文学会編「ドイツ文学辞典」(河出書房)
- 「新潮世界文学辞典」(新潮社 1990年)
- Klaus Doderer : Klassische Kinder- und Jugendbücher, Beltz Verlag Weinheim und Basel (1969年)
- Klaus Doderer : Lexikon der Kinder- und Jugendliteratur, Beltz Verlag Weinheim und Basel
- Irene Dyhrenfurth : Geschichte des deutschen Jugendbuches, Atlantis Verlag (1967年)

Werner Kohlschmidt und Wolfgang Möhr : Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte, Walter de Gruyter & co. / Berlin W 35 (1958 年)

Johanna Spyri : Heidis Lehr- und Wanderjahre, Cecilie Dressler Verlag (1993 年)

Johanna Spyri : Heidi kann brauchen, was es gelehrt hat, Cecilie Dressler Verlag (1994 年)

Johanna Spyri : Heidi, Georg Lentz Verlag (1978 年)

Johanna Spyri : Kurze Geschichten 2, Enßlin & Laiblin Verlag Reutlingen

Johanna Spyri : Gritlis Kinder , Droemersch Verlag München (1950 年)

Johanna Spyri : Rosenresli, Enßlin & Laiblin Verlag Reutlingen

Johanna Spyri : Rosenresli, DAISAN-SHOBO Verlag, (1955 年)

Johanna Spyri : In sicherer Hut, DAISAN-SHOBO Verlag, (1956 年)